

禪 戒 成 立 の 契 機

一六祖壇經を中心として—

榑林皓堂

小乘に小乘戒があり大乘に大乘戒があるならば禪宗に禪戒のあることは當然である。かくして同一の戒に對する解釋がそれゝの立場に從て異つてゐることは頗る興味あることであつて、禪戒は禪の立場より見て之を解釋する處に成立する。此意味に於て禪戒とは禪の立場より見たる戒と云ふことになるが、更に今一つ禪そのものとしての戒と云ふ意味を持つ。此場合禪戒とは禪即戒、戒即禪であつて、戒を持つことは禪を行することであり、逆に云へば禪を行ふことは眞の意味に於て戒を持つことになる。即ち只管打坐は持戒の相であると云ふことになるのである。

しかし斯の如きこと——禪即戒とふことが如何にして可能であるか。防非止惡を旨とする戒と精神統一を主眼とする禪とは直ちに不二の關係に在るとは考へられぬ。故に『辨道話』にも十八問答の第十一に「問て云く、この坐禪をもはらせん人、かならず戒律を嚴淨すべしや。示して云く、持戒梵行は禪門の規矩なり、佛祖の家風なり云々」とあるやうに一應區別して考へることが當然である。併乍ら戒の本質を探究して戒とは畢竟何物であるか、何故に其を護持せねばならぬかと問ひ詰めて行く處に戒と禪との本質的一致を見出すであらう。

それには先づ佛教の戒の扱方を見て行かねばならぬ。小乘大乘及び禪に於て如何にこれを取扱てゐるかを對考する必要がある。併しその前に戒品の數を擧げて見ると小乘では比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒と云ふが如く、非常に多數の戒品を列舉して居る。これに反し大乘に於ては其數遙かに少く僅に三歸三聚淨、十重禁の十六條と『梵網』の四十八輕を擧ぐるに過ぎぬ。然るに禪宗に於ては更に少く僅々十六條を數ふるのみであつて、小乘に比すれば數に於て格段の相違である。而も此僅々十六ヶ條を以て二百五十、乃至五百戒の意を究盡すると爲すものである。否嚴密に云へば十六條中の何れの一を以てしても、他の十五は本より五百の戒品をも之に攝し盡すと爲すものである。こゝにも亦禪戒の特色があり領域がある。が、これは以下、戒に對する一般的取扱ひと禪門のそれとが對考せられるに至つて自ら明となることである。

さて通常、戒を定義して防非止惡とも離過防非とも云ふ。これは眞摯なる求道心から出る尊き言葉である。而しかる定義が戒の本質から見て相應はしいか否かを先づ考へて見やう。蓋し二百五十戒等が隨時戒であり、佛弟子の不如法行をその時々に釋尊が訓誡した條々が、積り重つて二百五十にも五百にも達したとせられる限り、それは正しく禁制の箇條であるから防非止惡と解せられることが正しい。然し何故に吾々は禁制せられて多數の戒品を守持せねばならぬか。これに對する答としては教團人なるが故にと云ふことも一つの解答であり、相互の自制が無れば社會の秩序が破壊せられるからと云ふも解答になる、更にまた人生の目的は人格の向上に在るからと云ふも解答である。然し此答は絶對性を持たぬ。何故ならば教團に屬せざる人には戒無用となるであらうし、社會の秩序に影響せぬ場合——例へば山中獨居の如き場合には、如何に放縱の生活をしても對外的影響はないから矢張り戒を守持せずとも妨げないと云ふことになる。更にまた人生の目的を完全なる人格の構築に在りと思惟せざる人に取つては、戒は何等の威力を持たぬものとなるからである。即ち以上の如き戒品守持の理由を以てしては吾人に絶對性を持つて臨むものではない。教團人が、對社會關係に置かれたる人か、又は人たらんと希求する者にのみ必要なる德目と成り終ることになる。茲に於て重ねて云ふ吾々は何故に戒品を守持せねばならぬかと。こゝに『六祖壇經の』自性の戒とあるを引用し、その中に守持の絶對性を見出して見たい。

『壇經』頓漸第八志誠に戒定慧を示す段に左の如き偈がある。(本より此章には後人の妄添があつて、何處までが六祖の眞說かは明でないが、次の偈などは六祖の主張と一致するものとして探てよいと思はれる。)偈に云く

心地無非自性戒　心地無癡自性定　心地無亂自性慧

不增不減自金剛　身去身來本三昧

と。今こゝに必用なのは第一句である。心地無非(これ)自性の戒とある心地とは吾人の本心である。無非とは咎なしの謂であるから、これは吾人の本心自性は咎なく清淨無垢である。この無垢清淨の心を本体とするものが戒であると爲すものである。即ち吾人の本心を反省する處に戒は成立すると云ふものである。果して然らば持戒とは自性に復歸する運動であり、自性の輝を最高度に達せしむることであり、即處々を修飾せられざる天然のまゝの心情をもつて生きてゆくことである。更に云へば眞の自我——眞我を擴大することである。こゝに至つて防非止惡は止揚せられて自性守持となる。即ち戒は自家寶藏中の家珍なるが故に、進むで死守せねばならぬものとなり、そこに守持の絶對性が見出される。こゝに於て戒を自性守持と定義してもよい譯であるが、さりとて防非止惡が誤りであるとするにも當らぬ。なぜならば其は自性を蔭蔽するものを防止すると云ふ點に重點を置く定義であるからである。とまれ前者は非を反省する所より得たる定義であり、後者は反対に無非と徹底する所に成立することは興味ある對象である。

以上は戒を防非止惡と解することの當否と守持の絶對性を究明して戒成立の根據を突詰めたのであるが、これは心地無非を絶對的のものと見ての立論である。依て心地無非が如何にして絶對的鐵則なるかを一應考察する必要がある。諸經論にも處々に自性清淨の句を見る。が、何故に然るを證明した言葉を見ない。何れも決定的事實として其上に論を進められてゐる。禪籍などは殊にさうである。開口すれば先づ第一に本證妙修と云ひ證上の修と云ふ。本證とは本來迷ひなしと

云ふ義である以上自性清淨と結局別意はない。然し何故にさうであるか。これを次の如く考へることが出來やう。吾々が若し破戒に相當する生活を營むてゐる、道を脱れた生活態度を取つてゐるとすれば其は明に迷惑の人生、染汚の生活である。無非ではなく有非である。然し現在自己が迷に陥つてゐる、非なる行爲を爲してゐるとするならば、當然さうならざる以前、汚されざる以前の無非清淨なる原始態が豫想されねばならぬ。無明の發生が『起信論』に云ふ如く忽然念起して其始を究むることが出來ないにしても、念起以前、發生以前の眞純無垢、清淨離妄の心境が考へられねばならぬ。そこは正さしく迷悟も善惡も未だ岐れざる以前であつて禪に所謂朕兆未萌の世界である。本証の世界である。こゝ迄遡れば心地無非は一箇の假定に非ずして嚴然たる大事實であることが知られる。こゝに六祖の自性戒は成立する。この大事實に戒成立の基礎を置くのである。しかしこれは強ち六祖の創見ではなく、早く既に達磨によつて一心戒の名に於て唱導せられ、後には道元禪師によつて『教授戒文』に要説せられ更に後世禪戒の名を以て呼ばれる所のものであるが、今暫らく禪戒と云はずして自性戒として論を進めやう。

さて以上、心地無非の反省に眞戒成立の契機を見出したのであるが、自己に對する右の反省を他人に及せば當然一切衆生は無非なる戒徳の主体たることを發見し、茲に一切衆生悉有戒徳なる命題を得るのであるが、更に此考察を一層擴大して盡法界に及ぼすならば、妄情に左右せられぬ山河大地、日月星辰の運行はさながらに無非なる戒徳莊嚴の世界となるであらう。故に六祖の心地無非は一應は吾々の心の反省であるが、再應は有情非情に通じて云たものであつて、法界唯一戒、戒外無別法の思想に立つたものである。こゝに於てか『經豪鈔』に戒を規定して「森羅萬象の自道取なり」——萬象そ

れ自体が戒であると云へることは驚くべき卓見と云はねばならぬ。同時にまた『教授戒文』が攝律儀戒を釋して「諸佛法の窟宅とする所なり、諸佛法の根源とする所なり」——戒成立の根據は吾人自体に在る——と云へることは、同様の驚畏を以て達磨の一心戒、六祖の自性戒を裏書するものである。

三

以上に依つて禪門の戒が吾人の一心に基盤を置くことは明かと成たのであるが、これだけでは未だ戒と禪とが不二なことが明瞭になつてゐない。即ち戒禪不二なることが證明せられて初めて禪戒の成立が完成するのである。六祖の場合で云へば「心地無非」が禪の本領であることが確立すればよいのである。

然らば心地無非は禪の本領を究盡する命題であるか如何。それを明にする爲めには先づ禪とは如何と云ふことから始めねばならぬ。蓋し禪とは身口意三業を端直にし清淨にして、吾人の本來の面目を發揮して、大自然界の本然自爾なる大清淨に相應せんとするものである。換言すれば無非なる心地を開闢せんとするものである。大清淨、大寂靜なる自性に安住せんとするものである。これ前掲六祖の偈の第三句に「心地無亂自性戒」とある所以であるから、無非無亂の自性に徹することを得れば、それは前述の如く自性の戒であると同時に無亂寂靜の大禪定である。果然として吾人は自性を究明する所に戒と禪との不二無別を見出し得たのであつて、茲に禪即戒、戒即禪が確められたのである。一心戒、自性戒が禪戒であることが確定したのである。果して然らば『辨道話』に「もし人一時なりとも三業に佛印を標し三昧に端

坐するとき遍法界みな佛印となり、盡虛空ことぐくさとりとなる」は、「遍法界盡虛空ことぐく戒となる」でもあつて、坐禪の當所こそ正さしき持戒の相なることが知らるゝ。「坐禪の時如何なる戒か持たざるべき」と云ふに至つて禪戒は究盡する。目指す最後の地點に辿り着いたと云ふべきである。只管打坐が持戒の如是相ならば、一戒を守持する處に全戒守持するの義があると前に云ひ乍ら説明を保留したことが此處に自ら明と成つて來るのであらう。かくて坐禪は十六條戒具足の相であり、五百戒同時守護の端的であるのである。

以上を要するに禪戒成立の契機は

- (一) 禪には禪獨自の戒が無ければならぬであり
- (二) は吾人の本心自性を反省する處にありと云ふべく
- (三) は自性清淨の体現こそ禪の生命であると云ふ

三點にあると云へやう。本より自性を擴大して宇宙的觀察を爲すに至れば既に一步を哲學の領域に踏入れるものであり其處に禪戒の特色があると云へるが、今はどこ迄も宗教的領域に留めて置くことにしやう。